

選評 中島京子（小説家）

初回にもかかわらず、質の高い作品が集まって安堵した。大賞の『悔いの華』は細部が緻密に書かれていて、リアリティが圧倒的、ドラマ性も社会性もあり、胸に迫った。佳作の『鬼祓い桃園神社』もプロかと思うような完成度の高さに驚いた。ただ、キャラクター設定や物語に既視感があり、とくに最終話のお清の話が弱いと感じた。もう一つの佳作『にゅうらいふ』は、小説についての小説としての魅力を持っていること、AI の存在によって人の原初的な喜びや欲望が読者に開かれていく筋立てにも面白さを感じた。『ささやかな声を聴く』は文章がよかった。『はじまりの、その日』もとても上手い書き手なので、いずれどこから世に出る気がする。『往復書簡』は長い人生を描こうとした意欲を買う。しかし、書簡形式が今一つ生きていないと思った。『サビーヌにつぐ』は、「世にも奇妙な物語」の一話としてならじゅうぶん通用する面白さだったが、いかんせんこの長さを読ませるのは難しい。『水槽世界』はアニメ化を観てみたい気もしたが、世界観の作りこみに弱さを感じた。

選評 篠原哲雄（映画監督）

初年にもかかわらず 217 作の応募があり、最終に残った作品はどれも挑戦的で刺激的であることは間違いなかった。

大賞に決まった『悔いの華』は、運命の残酷さを考えさせられる小説である。作者は刑務所の間人間関係を丁寧に書いている。主人公と父親が一度きりの再会のときに主人公が父親に気づく展開もあるかもしれないと思う。「悔い」のあり方が変わるけれど。

僕の名前を冠する特別賞を作っていただいた『ささやかな音を聴く』は、ひょんなことから出会ってしまった異母姉妹の物語。妹が姉の存在を身近に感じた時の姉の方の人生の選択がドラマの肝。人間関係の機微を描く小説を好む僕にとっては強く惹かれる作品だった。

『にゅうらいふ』は、AI 人間が感情を分かち合い、性的な快楽を求め合う前半の描写が秀逸で、性についてのこれまでにない文学の可能性を感じた。

『鬼祓い桃園神社』では、「妖かし」的な世界と世間が一体になる。鬼退治の描写も、地元・中野の桃園神社の数百年前を想像しながら興味深く読んだ。「お清さん」の話が時代劇の定番の悪人退治になってしまったのが残念。

『サビーヌにつぐ』は、分身を出現させられる男女が分身同士で分身の数だけ関係を持つという設定に意表をつかれたが、分身たちの人間描写が深掘りされるともっと面白かった。

『はじまりの、その日』は、4つの短編を描いたオムニバス。でも僕はスカートを履くことに目覚めたハル少年とさつきさんが世界を切り拓く物語がもっと読みたかった。

『水槽世界』は、ファンタジーなら奇蹟が現実を変えるくらいじゃないと面白くない。綺麗な女の子の周りに魚が見えるっていうのを活かせばもっと行けたはず。

『往復書簡』は、息子のほろ苦さも母の愚直なまでの息子思いも理解できるが、思いを少しでも実現させてあげれば泣けたのかもしれない。フィクションは現実を超えたほうがいいのだと思う。

選評 中川翔子（歌手・タレント・声優）

最終選考候補作は、どれも力作ぞろいで面白く読みました。大賞の『悔いの華』は、とても完成度の高い作品でした。主人公は口調も態度もやさぐれている刑務官で、受刑者のなかに実は父親がいたという設定にとっても惹かれました。なぜ父親は自分の息子であることを主人公に伝えなかったのか、あるいは伝えられなかったのかなど、受け取り手への委ね方が絶妙だと感じます。私も最後の最後に泣かされました。

受賞は逃したのですが、私が一番推していたのは、『往復書簡～ロックと納豆とバカ息子～』でした。実体験かと思うほどリアリティがあり、独特なユーモアや切なさを感じる表現が散りばめられている作品で、家族愛や親心の温かさに感動しました。中野とふるさとの対比も面白かったです。

他に印象に残ったのは、『はじまりの、その日』。4つのオムニバス形式で進む物語で、それぞれの主人公が苦境に立ち向かう姿は、読み手に勇気を与えてくれますし、映像にしても伝わるものになると思います。

選評 鬼塚忠（作家エージェント・小説家）

大賞の『悔いの華』は、読んだ瞬間に「これは映画になる」と思った。刑務所や看守の描き方が取材して書くレベルをはるかに超えていた。看守の仕事を長く体験した人に違いない。一冊の本として出版するには分量が足りないが、今後、ぜひ書籍化をめざしたい作品だった。必ず世に出てほしい才能です。

佳作の『鬼祓い桃園神社』は、娯楽性十分で、夢中になって読み終えた。特に冒頭の妖怪たちの戦いのシーンは迫力があつた。キャラクターの描き方も話の運び方もうまいが、クライマックスにはもう一工夫あってもいいと思った。時代小説の文庫シリーズとして書店に平積みされていてもおかしくない作品です。

その他に私が強く推したのは『水槽世界』だった。魚をモチーフとしたファンタジーだが、著者の世界観がとてもよかった。ハリウッドの大作映画を観た後のような読後感だった。「世にも奇妙な物語」に採用されそうな『サビーヌにつぐ』も面白かった。文章もこなれていて読ませる。私としては、もっとも「中野的」な作品だと感じた。

ここでは触れていない作品もあるが、最終選考に残ったのは、それに値する8作でした。作者の方々、第一次・第二次選考に携わってくださった方々、みなさんが素晴らしいお仕事をなさったと思う。ありがとうございました。